

岩絵具



店頭に飾られた孔雀石

岩絵具 群青

岩絵具 緑青

**銅だから使い込むほど味わいが出る
銅だから殺菌力で墨の腐食を抑制できる**

『墨池』は、磨った墨を溜めて置く器である。だが夏場だと二三日で嫌な臭いがしてくるらしい。だが、一カ月経つても臭わないと評判の銅製の墨池がある。その発案者が（株）榮麓の笠井氏だ。早速、製品を見せていただくと、なんだかしゃぶしゃぶの鍋のような変わった形をしている。

「この形を思い付いたのは、三十五年ほど前。真中に突起物がありますが、この裏がへそになっています。そこに指を入れると、バランス良くしっかり墨池を持つことができます。さすよ」。ひっくり返して見るとなるほど真中が凹んでいる。さらには墨池のフチを外側に丸く折り曲げ、筆の余分な墨を絞る時に、筆先を傷つけないようにと工夫を凝らしている。それにしても、なぜ銅製なのか。

「墨は、煤を動物性の膠で練り固めて作ります。だから墨を磨つてそのままにして置くと、腐つて嫌

**銅鉱石に秘められた自然の色を
水を用いて幾重にも丹念に引き出す**

「岩絵具（いわえのぐ）の中に、緑青の名を見つけた。京緑青は、銅屋根にふいた緑青を集めて作ると聞いたことがあるが、岩絵具も緑青を使うのだろうか？そこで一万三千色以上の岩絵具を取り揃えた渋谷の老舗「ウエマツ」の上田氏に話を伺ってみた。

「緑青の材料は、孔雀石（マラカイト）です。江戸時代の土佐派を代表する絵師・土佐光起の書いた『本朝画法大全』には、紺青（こんじょう）、群青（ぐんじょう）、緑青、白緑青の四具を、大絵具と称しています。ここで、大とは、すばらしいという意味であり、そこには銅鉱石を使った製法が記されています。ちなみに群青には、藍銅鉱を使います」と上田氏。ではどうやって岩絵具は製造されていくのだろうか。

アートと銅

な臭いがしてくる。それを防ぐのに、銅の殺菌力を利用しました。ただし、それには蓋がきっちり密閉される構造でなければならぬそう。また、先ほどの形状の工夫を行うにも、接合して製作するとなぎ部から緑青がふく懸念もある。一枚の銅板で作ると、かなりの技術を要すはずだ。

「知り合いに腕のいい職人がいて、こんなモノを作りたいと細かく相談したんです。完成した墨池に墨を入れ、一週間、二週間、一カ月と時間を置きながら臭いや色の変化を確かめ、納得のいく墨池に仕上げました」。

いまは人口膠を使った墨が出まわり、墨汁を使う人も多い。それでも本物の良さを知る書家の間で、使うほど味わいが出る、笠井氏の墨池の評価は高い。



(株) 榮麓 代表取締役
笠井 資三氏

墨池



銅の特性を活かしたこだわりの墨池
裏には秘密の“へそ”がある



「まず鉱石や半貴石をハンマーで砕き、不純物を丁寧に取り除きます。次に細かく粉状になるまで粉砕し、丹念に絹ふるいに掛けるのです」。実に細かい仕事だが、ここからがまた凄い。この粉を水に溶くと、粒子の重い大きなものから徐々に沈殿する。この沈殿する時間差を利用して、一つの孔雀石から粒子の異なる沈殿物を何段階にも分けて取り出すのだ。

「太陽の白色光に反射し、小さな粒子は白っぽく、大きな粒子は色が濃くなります。粒子の大きさの違いで分けることで、一つの色のグラデーションを多彩に生み出せるのです」。日本画では、岩絵具を膠（にかわ）の液で溶いて描いていくが、同じ色でも鮮明さや濃淡などを、このグラデーションの違う岩絵具を絶妙に使い分けて表現する。だがそれもこうした丹念な職人の技の積み重ねがあればこそ可能なのだ。



ウエマツ / 絵具屋三吉
上田 邦介氏